

イラン研究の途上で出会った本たち（特集 アジ研 流読書案内 -- 研究者が薦める3冊）

著者	鈴木 均
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	199
ページ	27-28
発行年	2012-04
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00004004

アジ研流
読書案内

—研究者が薦める3冊—

イラン研究の途上で出会った本たち

鈴木 均

私は昨年、この一〇年来の研究成果を『現代イランの農村都市——革命・戦争と地方社会の変容』（勁草書房 二〇一一年）として上梓したばかりである。それゆえイランの現状についてお薦めの本といえば、取り敢えずこの本を第一に挙げる以外にはない。

だが私は同書を執筆するにあたって、先行研究という意味合い以上に意識し、また目標にもしていた二冊の本がある。一体それらの本の何をどう意識していたのか、まずは開陳してみよう。そして三冊目に挙げるのは本来の意味での私の愛読書である。

●徹底した個別事象への拘り

拙著の前半部分（特に第二章）において、私はイランにおけるフィールド調査の個別的な結果を殆ど無味乾燥と言えるほど羅列的

に叙述している。一般にデータの解釈と抽象化は社会科学に不可欠の要諦であるが、私はあえて問題構製の全体像を述べるべきこの部分で自分の叙述をその前の段階で留めることにしたのである。

実はこの叙述の文体は、アン・K・S・ラムトン著・岡崎正孝訳『ペルシアの地主と農民——土地保有と地税行政の研究』（岩波書店 一九七六年、原書はAnn K. S. Lambton, Landlord and Peasant in Persia: A Study of Land Tenure and Land Revenue Administration, Oxford University Press, 1953）を強く意識している。

訳者の岡崎正孝氏は、ある文章の中でラムトンのこのような執筆の姿勢をむしろ安易で性急な抽象化・一般化を避ける学問的に厳密な態度として評価している。確かに互いに隣接する村や小都市にお

いてあまりにも異なる事情が併存しているような場合、それらの事実を列挙するかわりに中間的な記述をすることは、事実について何も語らないに等しいといえるだろう。

だがそのことにも増して、私はまるでフィールドノートの引き写しのような事実関係の叙述を淡々と重ね、あえてそれに解釈や結論を書き加えようとしないラムトンの文体の中に、自分が直接的に知り得た等身大の社会的事実をそのままに定着させることを何よりも重要視するという強固な意志、社会科学的な抽象化・平準化と統計的な数値化の手續きが必然的に内包している危うさといかがわしさ、ある種の暴力性に対する根本的な懐疑をも読み取ったのである。

しかしながら、単なる個別的な

事象の連なりが読者に何を伝え得るだろうか、というのは大問題である。そこで私としてはせめて最低限の整理と分類を加えることによる自分なりの解釈と抽象化の作業を引き受けたつもりである。それは社会科学のな真実を統計的な操作のなかにこそ見出そうとする志向からすれば、確かにいかにもデータ加工に対する過度の逡巡とも見られるかも知れない。だが私が乾いた論理操作による抽象化・数値化のかわりに読者に伝えたかった論理は、全く別のところにある。

●内在的なストーリーの発見

拙著の後半にあたる第三章から第五章では、それまで個別的な事実に拘泥しがちだった晦渋な文章が急に流れ始めるのを注意深い読者は感じ取るかも知れない。この部分の執筆に際して私が強く意識していたのは、『イラン農民二五年のドラマ』（日本放送出版協会、一九九〇年）を始めとする故大野盛雄の一連の著作である。

大野先生は私のイラン研究の大学時代からの恩師であるが、先生もまた徹底的にフィールドワークに基づいた個別的な事実の集積に

拘ると同時に、それをいかに叙述するかに常に心を砕いておられた。大野先生は常々ラムトンの前記の著作について、「無味乾燥な事実をいかに列挙してもそれは社会・文化的な事実を伝えたことにならない」として、異なる文化の社会的事実を的確に伝えるための新たな文体の創出を果敢に試みられた。

そうした試行錯誤のひとつの成果が前記の本であるが、同書の中から大野先生は長年月にわたるイラン農村の社会構造の変質を、あたかも外部から完結した書割のある舞台において農民が演じるドラマのように描きだすことに成功している。

だがひとつの農村において二〇年以上という長年月を費やし、定着型の調査結果を凝集させて一冊の本にまとめた大野先生の仕事に対し、私自身の調査はあくまでも移動型、一過性であり、ひとつの調査対象地域に対する情報という意味では到底敵うものではない。また、そもそも全く時代背景の異なる現在のイラン地方社会において、長期的な定着型の調査を行うことがどの程度有効であるのかについても大いに検討の余地がある

だろう。

それでもなお、ある地域的な範囲における人々の生活や文化の断面を脈略のあるストーリーとして把握し、その調査結果を物語のような文体で叙述するという方法は斬新であり、私の行ったようなフィールド調査についても参考にすべき点が多いと思われたのである。

●比較の軸としての日本文化論

一般的に地域研究というのは方法的に確立しておらず、それゆえややもすれば単なる雑学の集積に過ぎないものになり勝ちであるという批判も最近では聞かれる。だが異文化研究としての地域研究は本質的に比較の学なのであり、多くの場合には研究者自らが背負っている文化を比較の基準とすることになる。

私の場合、自分が背負っている筈の文化に対する知識の浅薄さは若い頃ひとつの劣等感のようになつていった。そこで私は日本について持続的に考察するひとつの方便として、『共同幻想論』（河出書房新社、一九六八年、角川文庫など）以下の吉本隆明の著作を学生

時代から現在まで読み継いできた。吉本の著作はおよそ一〇〇冊以上にものぼり、その全体像を把握するだけでも容易なものではない。

だが長年吉本という絶対的に超えがたい著述家の作品群に挑んでいる中で、最近になって彼の思索の中にあるアキレス腱のような弱点を発見した気がした。それはたまたま『ダーウインを超えて』（朝日出版社、一九七八年）という今西錦司との対談集（というよりはむしろ吉本による今西への思想的インタビュー）を読んでいた中でのことだが、私は吉本隆明という思想家はやはり近代科学の進歩というものを過度に絶対化しているのではないかと強く感じたのである。

またそれには吉本の生年が一九二四年という年であったという時代背景も深く関わっているように思われた。彼の学生時代における日本の物理学や化学の水準は世界でも正にトップレベルを行くものであり、自身が理科系の東京工業大学電気化学科に進学している。そのことの孕む問題性は後年の原発反対運動批判にまで陰に陽に繋がっているのである。

いずれにしても一生取り組むに値する文筆家を選び、その全著作を長年月掛けて読み進んでいくことは、地域研究者として異文化に接する際の比較の基準をより確固たるものにするための、ひとつの有効な方法であると言えるだろう。その場合、それは自分の研究のための方便という段階から、いつの間にか人生の伴侶ともいうべき存在になってしまうことも少なくないのではないだろうか。

（すずき ひとし／アジア経済研究所 地域研究センター「イランおよびアフガニスタンの地域研究」）

※この文章の脱稿後、三月一六日に新聞報道によつて吉本隆明氏の訃報に接した。この場をお借りして吉本氏のご冥福を衷心よりお祈りする次第である。